

### 三、初代校長・渡辺龍聖

#### ◆名高商の歴代校長

名高商の校長は、その約三〇年間の歴史の中で五代を数えました（事務取扱を除く）。初代・渡辺龍聖（一九二一年一月～三五年五月）、二代・国松豊（三五年五月～四五年九月）、三代・高瀬五郎（四五年九月～四六年三月）、四代・野本悌之助（四六年五月～四九年七月）、五代・酒井正兵衛（四九年七月～五一年三月）です。



小樽高商時代の渡辺龍聖  
（小樽商科大学百年史編纂室提供）

四代の高瀬は官僚でしたが、これは敗戦直後の臨時校長的な意味合いが強く、その他はいずれも名高商創立期からの教員です。

そして最も長く校長を務めたのが、渡辺龍聖（わたなべ・りゅうせい、一八六二？—一九四五）です。事務取扱の期間をふくめれば、全史の半分近くにあたる約十四年間、名高商の経営責任

者の立場にありました。前章の内容からも分かるように、新設された名高商の教育や校風の基礎は、この渡辺の手で創られたとも言えます。

ここでは、少しページを割いて、この渡辺龍聖について紹介します。

#### ◆生いたちと経歴

渡辺龍聖の出生については、実はあまり詳しいことは分かっていません。一八六二（文久二）年（一説には一八六五年）、越後国古志郡吉水村（現新潟県栃尾市）に、加藤周浄の長男として生まれたとされます。その後一八八六（明治一九）年に渡辺伝蔵の養子となりました。

渡辺は、創立されたばかりの東京専門学校（現早稲田大学）に入学、一八八七年に英語本科を卒業し、帝国大学文科大学（現東京大学文学部）哲学科に入学しました。そして八九年（一説には八八年）からアメリカに留学し、ニューヨーク州のコネル大学大学院から哲学博士号を取得しています。日清戦争たけなわの九四年一月に帰国し、翌年には高等師範学校（戦後の東京教育大学、現筑波大学）の講師、すぐに教授となりました。

高等師範学校（一九〇二年から東京高等師範学校）では、倫理教育学を担当し、附属音楽学校の教授として学校経営にも参画しました。そして一九〇一年には、高師から独立した東京音楽学校の校長に就任します。同校の学生であった滝廉太郎に目をかけ、いろいろと世話をした

というエピソードも残っています。

翌年には、小村寿太郎外務大臣から依頼をうけた東京高師校長嘉納治五郎かのうじごろうの推薦で、清国（当時の中国）政府直隸総督、袁世凱えんせいがいの学務顧問となりました。以後七年にわたり、清国直隸省の教育改革にあたります。

帰国後は再び東京高師の教授にもどりますが、文部省の清国視察団の団長を務めるなど、教育行政家として高い評価を受けていました。そして一九一一（明治四四）年、留学していたドイツのベルリン大学から急ぎよ呼びもどされた渡辺は、新設された小樽高等商業学校（小樽高商、現小樽商科大学）の初代校長に就任したのです。

#### ◆小樽高商の初代校長として

小樽高商は前身校がないゼロからのスタートで、渡辺は苦勞しながらも、思う存分学校創業者としての手腕をふるうことができました。そして、前章で述べた名高商の教育や校風が、この時に試行錯誤した成果を基礎とするものであったことが分かります。

例えば、名高商教育の基本となった実践主義、科学主義です。名高商でも取り入れられた商業実践、企業実践、商品実験などの学科は、小樽高商が主要科目として本格的に導入したものです。立派な商品実験室や商品陳列館の設置や、各業種の模擬会社を想定して実習する「擬営



小樽高商の石鹼工場（小樽商科大学百年史編纂室提供）

実践」は、そのまま名高商でも行われています。また企業実践のための石鹼工場せあけん設立の試みは、名高商では印刷工場（一九二六年建設、建坪一三二㎡、鉄筋一階）として生かされています。

また人格主義教育も同様で、いわゆる紳士教育として提唱されました。土農工商の時代は終わり、これからは経済人が国家の存立や国際関係を左右するものだとして、学生に高い品格を持つ紳士たることを求めました。このため語学を中心とする教養科目も重視していました。

教員についても、名高商の時と同じように、授業科目に合った優秀な若い教師を広く集めています。渡辺が小樽高商から招き寄せ、日本の商品学、商品実験の泰斗となった小原亀太郎もその一人です。外国人教師が多かったことも似ています。

小樽高商の大学昇格運動が始まろうとした時、一人これに異を唱えてブレーキをかけたところなども名高商時代にそっくりです。

#### ◆渡辺の倫理学と商業教育

渡辺は、二つの高等商業学校で、合わせて二四年にもわたって校長を務めたわけですが、その学術的専門は倫理学でした。一九〇〇（明治三三）年に刊行されて版を重ねた『批評的倫理学』はじめ多くの著書があり、倫理学の教科書も書いています。

渡辺の倫理学について、本書で詳しく述べる余裕はありません。ただその特徴として、通俗道徳によくありがちな、欲望を否定し、その抑制のみを強調するものではなかった点は紹介しておきたいと思えます。

渡辺の言う「道徳的生活」とは、自己実現をめざす生活のことを指します。欲望を否定せず、むしろそれを「人の生命」「自己の善」であると認め、これをいかにコントロールしながら満足させるかを追求するのが、渡辺の倫理学であったといえます。近代アメリカで発達し、その経済発展に寄与したとされるプラグマティズム（功利主義・実用主義）哲学によく似ています。こうした倫理学は、渡辺の商業教育の基礎となっていました。帝国主義の時代が終わりに近づき、国際的な経済競争への対応が課題とされていた時代、渡辺の倫理学は商業専門教育に適

合的でした。一見畑ちがいの高等商業学校の校長を歴任したのも、むしろ自然なことであつたといえるでしょう。

#### ◆名高商創立委員長

さて、第一章ではふれませんでした。渡辺は名高商が創設されるまでのプロセスにも深い関わりがありました。

すでに述べたように、日本で六番めの官立高等商業学校を設置するにあたっては、名古屋以外にも有力候補がありました。この時、文部省の担当局長が意見を求めたところ、渡辺は即座に名古屋と答え、岡田良平文部大臣に意見具申をしたとされています（『剣陵十周年史』二頁）。これが事実とすれば、かねてより渡辺を高く評価していた岡田大臣が、名古屋を選択する一因になったことも十分に考えられます。

そして渡辺は、第六高等商業学校創立委員会の委員長に就任し、名高商の創立計画を指導したでした。つまり渡辺の名高商創業は、すでに創立前のグランドデザインの段階から始まっていたのです。

名高商設置を二カ月後にひかえた一九二〇（大正九）年九月、渡辺は文部省の命により欧米を視察します。おそらく彼の地の高等商業教育機関を見て回ったものでしょう。そして満を持

して名高商の赴任したことになります。

#### ◆名高商を去る

名高商時代の渡辺については他章にゆずり、ここで重ねては述べません。

さて、一九三五（昭和一〇）年、創立一五周年を翌年にひかえ、渡辺校長は自らの意思で退職することになりました。教職員から留任の懇請がありました。渡辺の決意はかたく、国松豊教授に後事を託したのです。国松は小樽高商時代から渡辺の片腕といわれた人物でした。

渡辺が辞職したのは、すでに七〇歳をこえた高齢もあるでしょうし、あるいは、戦争とファシズムの足音が高まり、名高商の教育理念を推し進めることができなくなる時代の到来を予感してのことでしょうか。

いずれにせよ五月八日、「学生は学生らしくあれ」「学生は学生の本分を忘るるな」という二大信条を最後の言葉として、渡辺は名高商を去ったのです。

#### ◆名古屋に骨をうづめる

一九三八（昭和一三）年、校庭に渡辺の銅像が完成し、五月一五日にその除幕式が行われました。この日は職員学生三〇〇人以上のほか、二〇〇人をこえる来賓が参列したといえます。



渡辺龍聖像

渡辺は、その後も名古屋市内の中区州原町（現昭和区）に居をかまえ、名高商を見守りました。しかし敗戦の年、一九四五年になると空襲が激しくなり、やむなく三重県桑名市に疎開し、そこで敗戦直前の七月、病のため亡くなっています。その墓所は名大のほど近く、八事の興正寺にあります。

失われましたが、一九八〇（昭和五五）年に名高商創立六〇周年を記念して、同窓会キタン会によって名高商のあった名市大・川澄キャンパスの一角に新しい像が建てられました。現在では名大経済学部の中庭で後輩たちを見守っています。